

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：12613

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22820029

研究課題名（和文） 戦時・戦後期都市社会における文化活動の実証的研究

研究課題名（英文） A study on cultural activities in urban society of wartime and postwar Japan

研究代表者

佐藤 美弥（SATO YOSHIHIRO）

一橋大学・大学院社会学研究科・特任講師

研究者番号：60587872

研究成果の概要（和文）：本研究では、戦時・戦後の都市社会に生活する人々の文化活動の具体相を明らかにすることを目的とした。とくに、建築作品の展覧会などの文化活動を実践した建築技術者グループである創宇社建築会およびその系譜に属する活動に参加した、竹村新太郎に関する史資料の調査、関係者への聞き取り、現地調査を実施し、彼らの戦時期の行動、思想を具体的に明らかにし、彼らの戦後の文化活動への連続を指摘した。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to clarify the cultural activities of people who lives daily life in urban society of Japan in wartime and postwar. Especially, document research, interview research and fieldwork on architectural engineer Takemura Shintaro who had joined the group of Sousha Kenchikukai which had done cultural activities in their everyday life were executed. The activities and the thoughts of Takemura and his colleagues in wartime became obvious as a result of the researches. And the existence of continuity between their activities of wartime and postwar was pointed out.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	970,000	291,000	1,261,000
2011年度	720,000	216,000	936,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,690,000	507,000	2,197,000

研究分野：歴史学（日本近現代史）

科研費の分科・細目：日本史

キーワード：都市史、社会史、都市文化、文化活動、建築運動、創宇社建築会

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究動向

日本近現代史研究において、戦時・戦後期の社会・文化に関する研究には一定の蓄積がある。

代表的な成果として、北河賢三による戦時・戦後の連続に留意しつつ、文化運動に着

目して、戦後の民衆意識を明らかにした研究（『戦後の出発』青木書店、2000年）は、地方の文化運動の組織、出版状況を検討し、その翼賛文化運動との人的連続と内容の断絶、戦後社会における秩序構築の運動としての意義を指摘している。

また、Harry Harootunian や松村寛之によ

る、戦時期における社会認識を特徴づける思想傾向に関する研究は、代表的知識人の言説の分析によって、その思想傾向を不安定な社会を調整するための伝統への回帰として把握した (*Overcome by Modernity*, Princeton: Princeton University Press, 2000年) (『戦争と国民意識』『日本史講座 9 近代の転換』東大出版会、2005年)。

このような研究成果の一方で、従来、文化運動に関する研究は地方農村の事例が多く、当該期の都市社会に生活する人々の日常生活の具体相、それと密接な関係をもつ、大規模に組織化されない文化活動のなかに表現される社会認識のありようの解明は従来達成されてこなかった課題であった。

(2) 本研究の位置づけ

そうした残された課題の解決のため、研究代表者は、当該期の都市社会における、従来研究対象となってきた、組織的な文化運動との関係の薄い、文化活動の事例を研究の対象とし、研究史上の欠落を埋めることで、戦前・戦時・戦後を貫通する文化活動の歴史の具体的事例を明らかにし、当該期社会像の再検討を行うことを試みた。

研究代表者はこれまで両大戦間期都市社会の日常生活とそこに表現される社会認識の研究を行ってきた。当該期とりわけ戦前期の都市文化は都市中間階級の消費文化として特徴づけられ、生活者の受動性や均質性が強調される (南博ら『大正文化』勁草書房、1965年)。これらは重要な特徴である一方、その強調は、山野晴雄・成田龍一が示したような都市生活者の内発的文化活動とその意義を埋没させる (山野・成田「民衆文化とナショナリズム」『講座日本歴史 9 近代 3』東大出版会 1985)。

この問題点の解決には、都市居住者の文化活動に関する史資料の発掘と検討が必要であると考えた。そこで1920年代から1930年代の東京で自主展覧会などの文化活動を展開した建築技術者のグループである創宇社建築会 (以下創宇社) に着目し、参加者であった竹村新太郎が残した史資料 (竹村新太郎関係史資料) を用いて、活動の実態解明、活動と同時代の社会状況の関係の考察を行ってきた。

これまでの研究では、創宇社の活動の背景となった建築界の思想傾向、関東大震災後の社会状況の分析などを行いつつ、1920年代から1930年代前半までの活動の実態解明を完了した。

本研究では以上の成果をふまえ、彼らの活動とそこにみられる社会認識の戦時・戦後における展開を実証することを試みた。

2. 研究の目的

戦時・戦後の都市に生活する人々の文化活動の具体相とそこに表現される社会認識を実証的に解明することが本研究の目的である。

従来研究対象となってきた、戦時期の組織的な文化運動との関係の薄い、具体的な文化活動の事例として、建築技術者グループである創宇社建築会とその系譜に位置づけられる文化活動を研究の対象とし、研究史上の欠落を埋めることで、戦前・戦時・戦後を貫通する文化活動の歴史の具体的事例を明らかにし、当該期社会像の再検討を行う。

同時に本研究が対象とする建築技術者たちの活動はこれまで、建築史学において概説的に言及されるにとどまってきた。歴史学的な視点からも、当該期都市社会における文化活動を具体的に明らかにすることができるという重要な意義をもちながら、これまで十分その活動実態、歴史的意味を明らかされてこなかった彼らの文化活動の過程を明らかにする。

上記の目的の下に、収集・調査を行った史資料に、以下の観点にもとづいて分析を加える。

- (1) 書簡の分析から、彼らの戦時期における交流、社会認識の実態を明らかにすること
- (2) 日本工作文化聯盟など同時代の団体の思想傾向との比較検討から、彼らのそれ以前の活動との連続性及び、同時代における歴史的位置を確認すること
- (3) 敗戦後における彼らの文化活動の展開過程の実態を解明すること
- (4) 敗戦後の諸文化運動と彼らの運動の関係についての関係を検討すること
- (5) 以上の研究活動を通して、戦時・戦後を通じた文化活動についての歴史像を再検討すること

以上が本研究の目的である。

3. 研究の方法

本研究では史資料の調査・収集と分析にもとづく、実証的な歴史研究の方法をとった。本研究によって得られた、戦時・戦後の都市における文化活動に関する知見は、学術雑誌、学会・研究会で投稿論文、口頭報告の方法で発表した。以下に研究の方法について述べる。

(1) 事前準備

事前準備として、調査の対象となる書簡・はがき類のうちこれまで撮影済みのものについて翻刻を進める。

また、竹村新太郎関係史資料の所蔵者との打ち合わせを行い、史資料調査の方針についての合意を形成する。

(2) 文献調査

創宇社に連続する文化活動は、それが左傾化した 1930 年代半ばに国家による介入によって消滅し、敗戦直後に弾圧が無くなってまもなく再開すると説明される（本多昭一『近代日本建築運動史』ドメス出版、2003 年）。しかし、戦時期に全く動きがなかったわけではない。

本研究の開始までの予備的調査によって、1936 年から 1943 年までのあいだに創宇社建築会の関係者の書簡等の史資料が残存することがわかった。また、敗戦後におけるグループ組織の動向に関するメモ類などの存在も確認できた。

研究期間内に、これら竹村新太郎関係史資料のうち、書簡類、メモ類、とくに 1930 年代後半以降から戦後期にかけての時期の史資料についての本格的調査・撮影・概要目録の作成を行う。そして、すでに撮影した史資料を含め、翻刻を行う。

上記史資料に加え、戦時・戦後の社会状況の文脈のなかで事例を検討する必要性から、同時期の新聞・雑誌資料の調査・収集、とくに戦時期における建築技術関係の文化運動団体として重要な日本工作文化聯盟関係資料、また戦後期において竹村らの活動を考えるために重要な同時期の文化運動関係の史資料の収集を行う。

(3) 聞き取り・現地調査

文献調査によって明らかになった事実の確認、補強、新たな史資料の発掘のために、創宇社建築会およびその系譜にある文化活動に参加した建築技術者の家族など、関係者への聞き取り調査を行う。

またこれまで知られていなかった、戦時期における研究対象の建築技術者の動向を跡づけるため彼らが携わった建築工事の現場の現地調査を行う。

具体的には、竹村新太郎の兄弟への聞き取り調査、戦時期における竹村の職場であった電力会社関連施設の現地調査（新潟県、富山県）などを実施する。

(4) 分析

調査・収集によって得られた史資料は、目録作成、翻刻などを実施、整理し、研究目的に添った分析を加える。

(5) 研究成果の発表

得られた研究成果は学術雑誌への論考の掲載、学会・研究会での口頭報告などによって積極的に発表する。

4. 研究成果

(1) 平成 22 年度の研究成果

平成 22 年度は、以下のとおりの成果を得られた。

①文献調査・収集

研究における主要な研究対象である、戦前・戦時・戦後にかけて文化活動を展開した建築技術者竹村新太郎の関係史資料のうち、とくに竹村宛書簡の翻刻を進めることができた。

また、NPO 法人西山卯三記念すまい・まちづくり文庫における史料調査・収集において、1930 年代前半および 1940 年代後半における建築技術者の文化活動に関する史料、1930 年代後半におけるエリート建築家を中心とする文化活動団体である日本工作文化聯盟に関する史料（機関誌『現代建築』など）の調査・収集を実施した。

②聞き取り調査

竹村や竹村とともに文化活動を行った建築技術者の関係者への聞き取り調査をのべ 9 人に対して実施し、彼らの生育環境、戦時・戦後における動向など従来文献では得られなかった事実を発掘することができた。なお聞き取り調査の過程で文化活動参加者に関する新たな史資料の存在を確認できた。

③分析と発表

第一に、文献調査によって得られたデータの分析の結果、1930 年代後半から 1940 年代にかけての竹村新太郎宛書簡によって、1934 年以降、建築技術者のグループによる文化活動が表面上みられなくなる時期においても、建築技術者たちは、書簡の交換というかたちで社会論、建築論をたたかわせ、また新たな人間関係を構築していたという事実が明らかとなった。これらは 1930 年代前半と 1940 年代後半の戦後の文化活動の中間における彼らの行動、思考を明らかにすることができる事実である。

また、現在閲覧が困難となっている、日本工作文化聯盟の機関誌『現代建築』を調査・収集することができた。これによって、しばしば竹村ら建築技術者たちの批判の対象となった日本工作文化聯盟の活動とそこにあられた思想傾向を明らかにすることが可能となる。

本研究により明らかとなった、戦時期におけるかれら建築家・建築技術者たちの活動や思考がどのように戦後と連続し、断絶するかという観点からの分析は今後更に深められるべき課題として残されている。

第二に、竹村新太郎の親類に対する聞き取り調査によって、これまで詳しくわからなかった竹村の生育環境や、戦時期の行動を詳細

に明らかにすることができた。また、聞き取り調査の結果明らかになった、創宇社建築会およびそれに連続する文化活動に参加した建築技術者の関係者に対する聞き取りも実施し、戦時期のみならず、その前提となる、1920年代における創宇社建築会とその参加者たちに関する歴史的事実はさらに明瞭になった。

以上の得られた知見を含めた研究成果は、戦時・戦後期の文化活動の前提となる1920年代の活動について検討した「1920年代における文化活動の意味——創宇社建築会の結成、あるいは〈原始〉への憧れ」（東京歴史科学研究会近代史部会、口頭発表、2010）、竹村新太郎ら通信省に勤務した建築技術者たちが参加した1931年の官吏減俸反対運動と文化活動の関連性について検討した『『我等のニュース』にみる雇員・傭人の文化——1931年の官吏減俸反対運動における』（『歴史と人間』研究会、口頭発表、2011）として発表した。

(2) 平成23年度の研究成果

平成23年度は、以下の研究活動を実施し、成果を得られた。

① 文献調査・収集

平成22年度から継続し、戦前期に、建築技術者グループである創宇社建築会に参加し、また戦時・戦後期に積極的に文化活動に参加し、多くの建築技術者と交流した竹村新太郎に関連する資料（以下竹村関係資料）に関し、3回のべ6日間の調査を実施し、従来継続してきた悉皆調査を完了し、年度末までに概要目録の作成を完了した。これに関して、竹村関係資料を管理する竹村文庫関係者と資料に関するレクチャーを内容とする会合を定期的に開催した。

また、建築家西山卯三の資料を所蔵するNPO西山文庫にて、2回のべ5日間、戦後の建築技術者たちによる文化活動に関する資料の調査・収集を行った。これらの調査によって戦時・戦後の建築技術者たちの動向の解明を一層進めた。

② 聞き取り調査

平成22年度までに収集した、創宇社建築会参加者及び関係者に関する資料、聞き取り調査で得られた音声データの一部の整理と分析を行った。

③ 現地調査

これまで知られていなかった創宇社建築会関係者の戦時期の動向に関して彼らが当該期に参加した建設工事現場等の現地調査を実施した。

④ 分析と発表

第一に、文献調査で得られたデータに関しては、竹村新太郎関係史資料の概要目録によって、竹村新太郎関係史資料の全体像が明らかとなり、今後の研究、とりわけ戦時期の文化活動の更なる進化、戦後期の文化活動の実態とその歴史的意味の解明への道筋がついた。戦時期に竹村が1920年代以来の創宇社建築会に参加した建築技術者たちとの交流を続ける一方、1931年の官吏減俸反対運動を通じて新たに知り合った建築技術者や社会運動家などとの関係を構築していく様子が明らかとなり、こうした戦時期の竹村の活動が、戦後まもなく開始される、建築技術者の文化活動に直接連続していく様子が実証された。

第二に、現地調査については、とくに竹村が1938年から建設工事に従事した信濃川発電所（新潟県津南町）の現況を調査することによって、文献調査の成果と合わせ、これまで明らかでなかった当該期の竹村の動向を跡付けることができた。当該期には、建築需要の変化など建築界の状況を背景に、これまで彼らの文化活動の主たるフィールドであった東京から離れる建築技術者たちも多い。竹村は信濃川発電所の工事に従事するために現地に居住することで、大都市における生活批判など内省的な思索を深めていく一方、長野市など地方都市の同好者と交流していく。以上のような事実が明らかとなった。

これらの研究成果の一部は、平成22年度「歴史と人間研究会」での口頭報告をベースとして、1930年代の建築技術者の文化活動と労働文化の関係をテーマに執筆した『『我等のニュース』にみる雇員・傭人の文化』（『歴史評論』、論文発表、2011）を発表した。

なお本研究に関連する成果として1920年代から50年代にかけての日本社会について、音楽教育を中心とする文化の観点から著述した書籍の書評「書評 上田誠二著『音楽はいかに現代社会をデザインしたか 教育と音楽の大衆社会史』」を発表した（『人民の歴史学』、論文発表、2011）。

また、建築技術者の戦時・戦後の文化活動の連続と断絶をテーマに、歴史学研究会近代史部会例会で「東京における建築技術者の文化活動について——その転回と潜行」を発表した（口頭発表、2012）。

(3) 今後の展望

本研究においては竹村新太郎関係史資料の調査・収集・分析により、従来建築史学において概説的に言及されるのみであった、当該期の建築技術者の文化活動の過程を実証的に明らかにした。

とりわけ、1930年の創宇社建築会の第8回展覧会以降、目立った活動が見られず、彼らの行動や思考が不明であった時期について

の研究を進展することができた。

当該期、1920年代に展覧会等の文化活動を展開した建築技術者は、1930年代前半には小グループによる学習活動などを展開したが、1930年代後半はそのような活動もみられなくなる。

しかし、それは彼らの文化的活動が途絶したわけではなかった。大都市における建築産業の停滞と地方における電源開発、あるいは徴兵などによってかつて文化活動に参加した建築技術者たちが分散していくこと、左翼的文化活動に対する弾圧などの社会状況といった、困難な条件のなかでも彼らは、訪問や書簡の交換といった個人的な交流を通して、従来文化活動のなかで蓄積してきた建築に関わる議論などを継続した。このような戦時期の動向が戦後の建築技術者による文化活動に連続していくのである。

本研究で明らかになった歴史的事実は、歴史学において当該期の都市文化史研究、社会像に関する研究に再検討を促す素材になり、また建築史学においては建築運動研究に新たな具体的事実を提供することが可能であると考える。

今後は本研究によってより明確になった戦後の文化活動との連続、そしてそのなかでの断絶に注意しながら、戦後都市社会における文化活動研究に展開していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 佐藤美弥、書評 上田誠二著『音楽はいかに現代社会をデザインしたか 教育と音楽の大衆社会史』、人民の歴史学、査読無、2011年、36-41
- ② 佐藤美弥、『我等のニュース』にみる雇員・傭人の文化——一九三一年の官吏減俸反対運動における、歴史評論、査読無、737号、2011年、36-51

[学会発表] (計3件)

- ① 佐藤美弥、歴史学研究会 近代史部会例会、東京における建築技術者の文化活動について——その転回と潜行、2012年3月15日、東京 早稲田大学
- ② 佐藤美弥、「歴史と人間」研究会、『我等のニュース』にみる雇員・傭人の文化——1931年の官吏減俸反対運動における、2011年2月20日、東京 一橋大学

- ③ 佐藤美弥、東京歴史科学研究会 近代史部会、1920年代における文化活動の意味——創宇社建築会の結成、あるいは〈原始〉への憧れ、2010年10月3日、東京 一橋大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 美弥 (SATO YOSHIHIRO)
一橋大学・大学院社会学研究科・特任講師
研究者番号：60587872